

ピースボート南半球世界一周の船旅の覚書

(2013年11月22日～2014年3月6日)

山中昇

下記URLをクリックすると、写真を見ることができます

<https://www.ibonthenet.com/ns/image/imageListRecentUpload/index>

目次

[第1章<乗船について>](#)

[第2章<船内生活>](#)

[第3章<船内は社会の縮図>](#)

[第4章<多彩で多様な船内人間模様>](#)

[第5章<旅の景色>](#)

[第6章<寄港地点描>](#)

[第7章<ヨーロッパ人による植民地政策の爪あと>](#)

第1章＜乗船について＞

■ 乗船した背景

- 再就職先で5年4ヶ月が経過、直前まで担当した大きなプロジェクトが成功裏に終了して仕事の区切りがちょうどつき、新たな課題への挑戦の前に何か新機軸を実行したかった
- 乗船直前まで、会社と自分の仕事で月300時間のペースで働いており、休息をとるべき時期だった
- 会社では社長の補佐役をやっているが、社長から気持ちよく了解を得ることができ、総務責任者に仕事の引継ぎもきっちりできた
- 60歳になり、人生の節目として、今までやらなかったことに挑戦したかった
- 自分自身健康であり、親の介護などもなく、自由行動が取れた
- 寄港地17箇所の内16箇所がはじめての地であり、この機会を逃すと後悔すると思われた
- 寄港地に個別に行くことはできるが、この船旅であれば一度に効率よく回ることができ、金銭面でも大きなメリットがあった

■ 乗船して良かったこと

- 寄港地での見聞きもさることながら、船内での930人の乗客との出会いも満喫しており、毎日が驚きと感動の連続だ
- 様々な人から聞く経験談から学ぶことが多く、今後の人生設計に大きな影響を与えそうだ
- 連続して何かを継続するには最高の環境が与えられている。私は、ヨガとエアロビを続ける中で乗船前と比べて1ヶ月で体重が4キロ減り、便通もよく、健康を享受している。食事の量も3割くらい減ったように思う
- 乗船前には月に300時間のペースで仕事をしていたが、乗船してからは朝から晩まで仕事から離れて生活を楽しんでいる。「退職して仕事が無くなったらやる事が無くて家庭内難民になったり、濡れ落ち葉で嫁に嫌がられたり、一日中退屈して暇をもてあましている」という状況とは無縁だ。仕事から離れても、困らずに充実した時間を過ごせるとわかったことは大きな収穫だ。このことは、仕事と遊びの切り替えができるということであり、3月6日に戻ったら、全力で仕事に打ち込める可能性も示していると思う。でも、今度は、時間配分を変え、個人の楽しみの時間を多くとりたい
- 通信事情が悪く、携帯もテレビもラジオもつながらない。インターネットはつながるが、陸上の30倍くらいのスピードでしか通信できないので、メールのテキストの送り受けがやっとの状態であり、遅くて、ウェブページは開かない。しかもインターネット接続料金が高いとあって、ほとんど使えない(100分で3800円!)。週に一度張り出される新聞ダイジェストが唯一の情報手段だが、だからと言って、生活に支障は無い。だから、余計な情報に左右されずにものごと

を本質的にじっくり考える暇はある。自分の人生の総括や将来設計をするには最適の環境と言えそうだ

- 船内で様々なセミナーがあり、日頃得られない知識を無料で吸収できる

■ 乗客の属性

- 930 人の乗客の生態を注意深く観察し、会話によって自分なりに研究したり、事務局から断片的な数字をもらって推測した
- 女性が 55%、男性が 45%
- 35 歳以下が 17%、36 から 65 までが 33%、66 以上が 50%、平均年齢が 60 代後半というのが私の見立てだ
- 一説には、60 台が 400 人と言うが、元旦に 61 歳になった私は、中高年の中で圧倒的に若かったが、64 以下の人はあまりお目にかからなかった。反対に、60 代後半のいわゆる「団塊の世代」の人がやたら目立った。これからすると、60 から 64 がせいぜい 100 人、65 から 69 までの団塊の世代の人が 250 人で、その圧倒的多数が退職後フリーになった男性もしくはその奥さんと思われる
- つまり、この船の乗客は、断片的な数字の上でも、実感の上でも、60 代後半の団塊の世代を中心として、元気な 70 台、80 台を含めた高齢者が圧倒的多数であることは間違いなさそうだ
- 最高齢は 93 歳のお婆さんであり、息子夫婦が車椅子に乗せて世話をしている
- 92 歳、91 歳、90 歳の人も複数居られ、70 台、80 台の人目立つが、信じられないくらい皆さんが元気だ
- 91 歳のお婆さんは娘夫婦(67 歳)と乗船しているが、船内で階段を 1 人で上り下りし、モーリシャスでは水着を着て海に浸かっておられた！
- カップルは 3 人に 1 人。言い換えれば、単独で乗っている人が 3 人に 2 人と推測している。これは、避難訓練のときに、連番の ID 番号で呼ばれる人の割合から勘案した数字だが、今回はカップルがいつもより多いらしい。南極やマチュピチュなど寄港地やオプションツアーが魅力的なので夫婦連れ立ってというケースが多いと考えられている。但し、船内でさらに聞いてみると、既婚で、片方だけが来ている例も結構多いようだ。人生観や価値観の違い、家のこと、親の介護など事情は様々なようだ
- 単独の人は 60 歳後半以降の人が圧倒的に多く、男性の多くは「団塊の世代」とそれ以前の、高度経済成長を支えた世代だ。退職後の人生を旅で満喫するという趣だ。この世代は健康だし、時間もあり、お金もある(正社員として退職金も出た、不動産も株も上がった、年金も満額出る)世代だ。話を聞いてみると、夫婦どちらかが 1 人で乗っているケースが多い。親の介護など家の事情、仕事、体力、健康、趣味や価値観の違いによるものと思われる
- 若い人は大半が単身と思われる

■ コストパフォーマンス

- 4人部屋だと、早割りで120万円。オプションツアーに行かず、すべてを船中で質素に過ごせば、120万円で105日間、3食付で世界1周旅行を楽しむことができる。家(持ち家、ローン無し)に一人で居ても電気・ガス・水道、食費などで月に最低10万はかかると思われる。105日では35万だから、旅行にかかる追加費用は85万円だ。退職金などの蓄えがあり、さらに年金が月15万もあれば年に1~2回は乗れるはずである。6回目という1人暮らしの女性がポツリとつぶやいた一言がすべてを表していると思われる。「家に居ても1人だし、ここにいれば3食ついて友達もできる、船内での楽しみもたくさんある」
- うわさだが、生活保護を受けている人が乗客に居るらしい
- 通路を歩くと、4人部屋の様子がときどき見えるが、特に男性の場合は、たこ部屋状態であり、とても生活する気にはなれない。聞けば、朝早く起きたら、最低限の身の回りの品をリュックに入れ、寝るまでの間、船内のどこかで過ごす人も多いようだ。2段ベッドの下は、6万円払うと専有できるそうだ。そうでない場合は、話し合っ、例えば、2週間おきに上下交代するということをやっているグループもある
- 2人部屋もあるが、他人同士の場合、病院の大部屋のように、カーテンで仕切っている部屋も見たことがある。カップルの場合は、普通はカーテンで仕切ったりはしないが、ベッドの移動が簡単にできるようになっており、両端にシングルを二つ配置するか、二つ並べてダブルベッドにすることもできる。
- 1人部屋はダブルベッドだが、部屋を広く使いたいために、シングルベッドに変えている例も見られる
- 夫婦で乗っているが、それぞれ別々に4人部屋に住んでいるというパターンがあると知った。2人部屋だと1人200万円なので2人で400万円だが、4人部屋だとそれぞれ120万円なので2人で240万円だ。2人部屋よりも160万円も安く済むし、それぞれ同姓の友達ができやすいというメリットもあるようだ
- 姉妹、姉(74)と弟(68)で乗っている人も居る。
- 家族で乗っている例も結構ある。91のおばあちゃんとその娘(67)、その旦那の3人の例、93のおばあちゃん(車椅子)とその息子、その嫁の3人の例、年齢不詳だが、おばあちゃん、娘、その息子(中学生)の3人で乗っている例がある
- おしなべて、ピースボートは飛鳥Ⅱの半額以下で乗れるらしい。船内の事情通の話では、飛鳥は集客に苦労しているようであり、2年に1度しか世界1周のクルーズを提供していない。聞き間違いでなければ、日本丸はもうからないので、売りに出ているらしい。金持ち日本と言うが、豪華客船でのクルーズ文化は根付いておらず、ピースボートの手軽さが需要層にぴったりのようだ
- 10階にはスイートルームがあり、大阪の金持ちの92歳の男性が1人で乗っておられた。ピースボートは、スイートルームであっても食事は他の人と同じものを同じところで食べる。飛

鳥に乗った人から聞いたが、飛鳥はそうではなく、クラスによって食事も違うらしい。どちらが
いいかと聞いたら、ピースポートの方が乗っていて楽しいとの意見だった。自主的に参加する
企画が多いのがいいらしい。ピースポートは、乗船客自身がまるで学校の学芸会や文化祭、
旅の一座の芸人のような感じで参加する。プロの華麗な演技を鑑賞するだけの飛鳥などとは
違い、テレビで言うと、視聴者参加番組なのだ。でも、この点にこそピースポートの醍醐味が
あるようだ → [目次](#) に戻る

第2章＜船内生活＞

■ ニックネーム

- 船内では、大多数の人がニックネームを使っており、親しくなると本名や素性を明かすのが通例だ。親しくなった者同士で名刺交換も頻繁に行われており、下船後も付き合う人が結構居るようだ。同窓会のようなものもできるそうで、交流も活発なようだ。クーちゃん、ミッチーのような本名の愛称、エミリー（恵美子）のような呼びやすく響きのよい呼称、浦島太郎など聞いただけでは想像もつかない呼称など様々だ。私は、船内では本名で通した

■ 多彩な船内の企画

- 船内では、真夏のクリスマス、紅白歌合戦、年越しカウントダウン、正月行事（船内初詣、餅つきなど）、夏祭り（盆踊り大会）などが次々と企画され、乗客も参加して手作りで実行される。都度、ファッションショーなども手作りで行われ、多彩だ。それが楽しくて病み付きになり、乗船を繰り返す人も多いようだ。言わば、町内会の行事に参加したり、その世話役を船内でやるようなものだ
- 事務局主催の講演会や（環境保護、貧困、平和、移民、冒険、寄港地情報など）、ラジオ体操、カルチャースクール（社交ダンス、ヨガ、エアロビ、太極拳、ノルディックウォーキング、水彩画教室、和太鼓など）、自主企画と呼ばれる乗船者手作りの様々な企画（ブレイクダンス、フラダンス、よさ恋ソーラン、阿波踊り、囲碁、将棋、マーじゃん、卓球、サッカー、聖書朗読、ゴスペル、日本昔話朗読、詩吟、謡曲、居合い、ジャズ、ウクレレ、ギター、オカリナ、横笛、祭囃子、南京玉簾、けんだま、折り紙、人形作り、布で草履作り、ちぎり絵、ふしぎな話を語る会、などが所狭しと行われており、こまめに参加していると一日中休む間もないほどだ。毎日、3日先の企画の陣取り合戦が繰り広げられ、多くの人が手伝いに加わったりして実に活発だ。見も知らぬ人たちが年齢や経歴を超えて共同作業することに醍醐味があり、まるで高校や大学のサークル活動だ。ピースボートの最大の特徴はここにあると言っていいかもしれない。参加する人間一人ひとりが自分の存在意義を確認でき、仲間意識を共有できるのだ。陸上では、地域や家庭内で孤立している人たちが特技を活かしながら活躍して認められる場が与えられ、言わば、ピースボートの船内生活が一番光り輝き、生きがいになるようだ。地元や自宅に帰ると出番が無いが、ピースボートの中では周囲から尊敬される、「ピースボート英雄」と呼んでもいいような人が多数乗船しておられるようだ。

■ 医療体制

- 船内には医務室があり、医者（男性）と看護師（女性）が詰めている。医者は専門は整形外科とのこと。診療を受けた人の話では、分厚い本を見ながら薬の処方をしているそうだ。船内は部屋が乾燥しており、風邪や喘息などが圧倒的に多いと聞いている。専門外なので医者も大変だ。乗船前に医療保険に入らなかった人の場合、診療と薬で、2回で15000円取られたとのこと。それでも有難い存在だ
- 複数の乗客が言っていた。「船内の医者は内科が専門で、乗客の大半である年寄りがかか

りやすい病気に関して幅広い知識と経験を持った医者に乗せるべきだ」

■ 棺おけと船内死亡

- 船内には棺おけが4個置いてあるという噂がある。船内の医者に聞いたら、数は不確かだが、2-3個はあるそうだ
- 船内での死亡に立ち会った人から直接、経験談を聞いた。同室の80歳後半の人が亡くなり、(老衰?)事務局を手伝って本人の荷物の取りまとめなどをしたとのこと。火葬が可能な寄港地がしばらくないため、死体を氷付けにして、棺おけに入れた状態でカナダまで運び、そこで火葬し、家族が遺骨を持ち帰った。死んだ人が立派な人だったので、帰国後に関西で行われた葬式に参列したとのこと
- 今回の船は70台から93歳までの人が300人くらい居ると思われるが、105日間で何かあっても不思議ではない。船内では、「二人死んだらしい、現場を見た人から聞いた」という話がまことしやかに囁かれている。2月19日現在の話だが、船医に聞いたら、船内で死亡した人は1人も居ないそうだ。

■ 船内食事

- 4階にメインレストランがあり、ここは、基本的に和食だ。朝と昼はバイキング形式だが、朝はお粥や梅干などもある。夜はセットメニューで、ありふれた食堂の定食といった雰囲気。お世辞にも豪華とは言えないが、陸上で日頃食べている程度のものは充分楽しめる。ここではデザートも付く
- クリスマス、正月、バレンタインデーなどの節目には、豪華なセットメニューが供される。ワインも出る。正装しての着席が求められるので、華やかな雰囲気になり、とても気分がうきうきする
- 9階にビュッフェが2箇所あり、1箇所では昼食に麺類が出る。うどんやそばの日は長い列ができる。もう1箇所はハンバーガーなどの洋風食事が出される
- 3時から4時にお茶の時間があり、ケーキやクッキーが楽しめる
- 若い人や男性の中には日に7食食べる大食漢が居るらしい。3食を4階のメインレストランと9階のビュッフェで食べ、ティータイムのおやつも楽しむという具合だ
- メインレストランの夜はデザートが出るので、そうではないビュッフェで食事し、メインにデザートだけ食べに来る人も居ると聞いた
- 寄港地のオプションツアーで現地の大ぶりの食事が続くと辟易し、いつもは文句を言っている船内の食事(和食)が恋しくなるから不思議だ
- 船内でやたらと食べている、「やせの大食い」タイプの人に聞いたら、お金が無くて陸上では十分食べられないので、船内でたらふく食っているとの事。だが、あんなに食べたら糖尿病になるのではと不安になる

■ 船内クルー

- 船内にはクルーが 300 人以上居るそう。大半がインドネシア、インド、フィリピン人だ。ベトナムやカンボジア人などは居ないが、ネパール人は居るとのこと。バーとレストランで親しくなったバリ島出身のインドネシア人の話では、日に 11 時間労働で、朝の 4 時に寝て正午 12 時に起きる。月給 70000 円。ただし、衣食(3食)住がすべて付いているので、彼らの給与水準からしたらそれほど低くはないらしい。国では仕事が無いそうであり、憧れの職場のようだ
- 部屋の清掃とベッドメイキングをしてくれるインドネシア人に聞くと、30 人分を担当しているそう。単調な仕事で、結構重労働だが、国では仕事が無いので、ありがたいそう
- 白人の女性クルーが居るが、ルーマニアやブルガリア人らしい。ルーマニアはヨーロッパでも最貧国であり、下働きの女性が多いようだ。EU でも、モルダビアなどの貧しい農村の娘を騙して売り飛ばす人身売買が度々問題になっている
- 金持ちの日本人が乗客として船旅を楽しみ、食事や清掃などの身の回りの世話は貧しい国の低賃金外国人がするという構図は、今後、少子高齢化がさらに進む陸上の日本社会でも一般的になるだろうと予想する。船内では、何もトラブルは無く、この仕組みが回っている

→[目次](#) に戻る

第3章＜船内は社会の縮図＞

- 食事のときに様々な人との出会いと会話がある。内輪だけでパーティーをするなどの特別な事情がなければ席順の自由はないが、これのおかげで毎回、知らない人たちとの出会いと会話が楽しめる。初対面ではお通夜になりがちなので、私は大概、テーブルに居る同席者に対して一番に声をかけることにしている。「どこからいらっしゃったのですか？ 初めての乗船ですか？ 今日のツアーはどれに参加なさったのですか？ 今日は暑かったですね、アクセントで判断するとご出身はひょっとしたら名古屋か中国地方ですか？」などと口火を切ると、途端に会話がはずむ。そそくさと退席する人も中にはいるが、大概の人は会話に参加して楽しむ。こうして得た情報の中でさらに聞きたい人が居れば個別に声をかけ、一緒に食事しながらもっと詳細な経験談を聴くことを繰り返した。おかげで陸上では接することがないであろう人たちから豊富な経験談を聴くことができ、感動や勇気を得ることがしばしばだった
- **全国から集まった人**
 - 船内には北海道から沖縄まで様々な人が全国から集まっている。こういう場所では同県人というだけで親しくなるから不思議だ。船内では度々、同県人会が行われている
 - びっくりしたのは、「慶応出身者集まれ！」、「立命館出身者集まれ！」という伝言板であり、属性による仲間意識は尽きることがないようだ。私の出身校の集まりがあっても私は出ない。船の中で学閥をひけらかすのは鼻持ちならず、いやらしい
- **世代間ギャップ**
 - 30歳以下は100人くらいなのに対して、65歳以上は500人を超えられる。船内で様々な行事があるが、若い人は若者だけで集まることが圧倒的に多く、世代間の触れ合いがほとんど見られない傾向にある。「船内家族」というものがあり、船内で擬似家族づきあいをするのだが、傍目にぎこちない印象がある
 - 船内バーベキュー大会があったが、集まって飛んだりねたりして大騒ぎしているのは若者だけ。その中には中高年は決して入れず、遠巻きにして見ているだけだ。世代間のギャップを埋めるのは至難の業だ
- **学校の先生や看護、介護の仕事をしていた人が多い**
 - 船内で知り合った人の多くが、元、学校の先生や看護婦、介護をやっていた人だ。活発で多彩な人が多く、組織力もあって船内活動をリードしている
- **船内地獄耳**
 - 閉ざされた空間にある船内ではうわさが絶えない。特に男女の関係については何かとうるさい。でも、これは陸上と同じだ。夫婦のように見えるが実はそうではなく怪しい関係だとか、船内で誰と誰がくっついたとか、離れたとか、どれがいい男か、いい女かという品評も盛んだ。
 - 4人部屋では、仲の良いグループ、誰も口を利かないほど敵対関係になったグループなど

様々だ。うまくいかないグループでは、ものを隠されたり、洗濯時間や電気を使う時間が少しでも長いと文句を言われたり、線を引っっこ抜かれたりなどの意地悪をされるといった話が面白おかしく増幅され、船中に伝播される

- 船内で誰かが体調を崩すと、あっという間に話が広まる。食堂や船内企画の場所で会わなくなるからだ。カップルの一人が病気で寝込み、1人だけの時が目立つと、夫婦喧嘩したのだろうかとか、憶測と噂が喧しい。2人部屋や4人部屋の人がインフルエンザで1人部屋に隔離されると差額料金をとられるそう。でも、これは、保険で処理できそう

■ 奉仕の心

- 船内には誰に頼まれたのでもないのに、手間隙かけて材料を用意して持ち込み、和紙や着物の布などを使った伝統的な工芸品を作るサークルを開いている人が複数居られる。中には、材料費の負担を申し出ても断わるケースもあり、心が和む光景だ。こうしたことが縁で、下船後も交流しているようだ
- 80歳くらいでこれが最後のつもりで乗船した女性の中には、船内で知り合った人に自分が大事にしているものを無償で与えることを喜びとする人がおられ、これもほほえましい光景である

■ 助け合い

- 船内には高齢者が多いが、この人たちにとっては、風の強い日など、デッキに出るドアの開け閉めが大変だ。指を詰めたりする事故につながりかねない。そんな時、誰かれ構わず親切にドアの開け締めを手伝う人が多いので心がなごむ。人に親切な人が多いのだ
- オプションツアーでも、足腰の悪い人が多数居るが、手を差し伸べたりして親切にしている光景が目立つ。私も、機内で椅子から立ち上がるときに苦労している人の手を支えたり、荷物を上げ下げするのを手伝ったり、込み合ったボートに乗ったときなどは私の親くらいの人に席を譲ったりしている
- 前述の船内の医療体制を反映して、困っている人が居ると、ただで薬の融通をするなどのほほえましい好意が盛んに行われている。

■ 挨拶

- 船内の階段、通路、エレベーターなどですれ違うとき、見知らぬ人でも軽く会釈したり声をかけたりして挨拶を交わす。都会ではありえない光景だ。船の中で時間と空間を共有するから、一つの共同体として隣人としての意識が生まれ、人に優しく親切になれるのかもしれない
- 全体として、若い人はすれちがっても挨拶をしない人が多い。この違いがどこから出てくるのか調べてみたい気がする

■ 忘れ物、泥棒

- 1000人近く乗客が居て、しかも高齢者が多いときは、忘れ物や紛失物が多くなる。船内の

忘れ物はレセプションに届けることになっているが、隔週ペースで届けられた品物の展示がなされる。ペットボトルなどもあり、乗船客の質の高さを物語るものがたくさんある反面、紛失物が出てこないケースもある。陸上でも同じことだから驚くにはあたらない。

- もう一つ面白いのは、展示コーナーを見ていると、無くしたという人が、しばらくすると、「部屋のどこそこにあった」というケースが結構目に付く。船内で泥棒にあったという声もたまに聞かれるが、割り引いて聞くべきだ

■ 水漏れ事故

- パイプの破裂と思われるが、6階や7階の一部の部屋が5センチくらい浸水し、床に置いていたカバンなどが水浸しになったと聞いた。この種のトラブルは頻繁にある様子だ
- 船は、乗っている総人数が1300人くらいで、部屋だけで500くらいある大型のホテル並みだ。その設備の維持が大変なことは想像に難くない

■ 室内トイレとシャワー

- 洗面台、トイレ、シャワースペースが一体になった作りである。シャワーは水流がかなり強くまで調整できるし、シャワーヘッドが自在に動かせる形なのでと言うので、子供が夏に行水するビニールのプールを持ち込んで使っているとのこと。水を浸して洗濯のたらいに使えるので便利だそう

■ 洗濯

- 部屋で洗ってタオルに巻いて絞って水気を取ってから部屋に干せば1日で乾く。シャワーを浴びるたびにそうしていたが、船内でランドリーサービスがあり、大きな袋に一杯になるまで突っ込んで一袋で350円だとわかり、浴衣などをまとめて出すようにしている

■ 船内売店

- 駅のプラットフォームにある小型のコンビニのようなものがあり、船旅に必要な最低限のものが置いてあり、9時から20時まで開いていて便利だ
- 船内で何か報せがあり、売店で買えるとわかると殺到して在庫がなくなるので、早めに買いに行く習性がついてしまった
- 飲料の自動販売機も24時間動いており、コーヒーやジュース、スポーツ飲料などが買える。アルコールもビールを中心に一通り買えるので、バーが閉まっても飲めるから便利だ
- あちから知ったのだが、数万円出して予約すれば、冷蔵庫を貸してくれるらしい。タヒチの市場で調達したマグロの切り身を入れておき、酒を飲みながらたらふく食べた人が居ると聞いた
- 料金を払えば、トイレをウォッシュレットにしてくれるそう。トイレの隣がシャワールームなので、私は、便のあと、シャワーで尻を洗っていた。水流がものすごく強いので、快感があり、くせになった

■ 海賊騒ぎ

- モーリシャスを出てマダガスカルに向かう途中のインド洋では、夜間に灯火管制が敷かれ、デッキは外出禁止、部屋のカーテンを閉めることも厳重に義務付けられた。ソマリアから出てくる海賊に見つからないための措置だそうだ。

■ 美容室

- 船内には美容室があり、美容師 1 人が担当している。予約制。かなり先まで予約がとれない。お正月前は特に込んでいたようだ
- 料金は陸上の 2-3 倍というところだろうか、男性のカットだけでも 3150 円、
- 船内には美容師が乗客として数名乗っており、ロコミで散髪してもらう人が居るようだ

■ サウナ

- 10 階にサウナがある。男女別々。90 分 700 円と高い。1 月始めに、特別キャンペーンで 500 円に割引する通知が出た。多分、閑古鳥が鳴いていたのだろう。500 円なら行ってみようかという気になるから不思議だ。これが「値ごろ感」というものか

■ 針灸治療

- 10 階サウナの隣に針灸治療が受けられるコーナーがある。完全予約制。うまい人らしく、評判は上々だが、値段が高いのが気になる(1 回 1 時間 8000 円)

■ バーとアルコール

- 船内にはバーが数箇所あり、カラオケとダンスが楽しめるバーもある。お酒は何でもあるし、真夜中まで開いている。アルコールは自動販売機でも 24 時間買えるが、陸上の倍の値段
- バイアというバーはバンド演奏で踊れるようになっており、毎晩、5 組くらいのカップルが踊りに来ている。メンバーはいつも同じ。日によっては、カラオケタイムもある
- ケープタウンで各国のビールをしこたま仕入れたようであり、1 月 3 日までお正月特別割引価格が適用されたが、2 月 15 日までその特別価格が適用された。きっと在庫になったのだ

■ 船内バースデーパーティー

- 船内で誕生日を迎える客には、船から小さなバーデーケーキとカクテル 1 杯無料の券が配られる。メインレストランではそのケーキが出され、クルーがハッピーバースデーを歌って祝ってくれるサービスがある。元旦生まれの私は、船内で毎日世話になっているカルチャースクールの先生や、旅や生き方などで感動と勇気を与えてくださった人たち、総勢 16 名を招待し、大きなケーキとシャンペンなどのアルコールを振舞う形で感謝会を開いた。一人を除いて全員来てくださったのだが、都合で参加できなかった方は達筆で色紙を書いて席までわざわざ持ってきてくださり、感動した。不思議なことに、元旦の誕生日が 14 人も居て船内で一番多いと聞いた。多分、前後に生まれた人は、親が元旦として届けたのだろう。私の場合は正真

正銘元旦だ。除夜の鐘を聞いていると陣痛が始まり、昭和28年の初日の出の時刻に生まれたので「昇」と命名したと聞いている(日出男も候補だったそうだ)

■ プールとジャグジー

- 船のデッキにはプール(海水)が 3 個とジャグジー(真水を温泉並みに沸かしている)が 3 個あり、天気がいい日には一日中楽しむことができる。まるで、リゾートビーチに居る感覚が楽しめる。横浜を出て赤道を越え、ケープタウンに行くまでに日焼けし、顔の皮膚が 1 枚むけたくらいだ。色の黒さでは船内でも有数だ
- 8 階のジャグジーは水温が 40 度近くまで温められ、温泉気分が楽しめる

■ 船内新聞

- 船内では、毎日、新聞が発行される。夜の 8 時頃に 5 階レセプションと 8 階事務局前に詰まれるので各自で取りにいく。翌日の日程表と日程のハイライトが紹介してある。また、毎日 1 人ずつ乗客にインタビューして紹介するコーナー(タイトルが一期一会、450 字)がある。私も 2 月 3 日号で紹介された」
- 日程表は分刻みであり、関心がある企画にマーカーなどで印をつけて一日の時間の過ごし方を決める。何事にも積極的な人は朝から晩まで、ご飯をゆっくり食べる暇もないほど駆けずり回っている

■ 電力事情

- 船内では、240 ボルトが用意されているが、実は、洗面台の隣に据え付けられているドライヤーの本体にある小さな窓を開けると、230 ボルトと 115 ボルトの差込が用意されている。115 ボルトはシェーバー専用と書いてあるが、多分、ほとんどの日本の製品がそのまま使えると思う(電力消費が大きい器具はダメかもしれない、ショートしてフロア全体が停電になったりしたら面倒なので、実験はしていない)
- 船内のあちこちから聞こえるのが、100 ボルトの日本製電気器具を(差込形状)変換プラグをつけて 240 ボルトの差込口にそのままつないで壊れたという悲劇だ。部屋の 240 ボルト差込口は 2 本の O ピンタイプだが、それに合う変換プラグだけ用意して事が足りると誤解していることに原因がある。電気器具本体も 100~240 ボルト対応でなければならない。100 ボルトの電気ポットの場合は、コイルが焼ききれるまで使えるが、2 週間くらいは使えるケースもあるが数日でだめになっても不思議ではない。電子部品を使っている最新の高級タイプドライヤーなどは 1 発でパーだ
- パソコンやデジカメ、携帯電話などは基本的に 100~240 ボルト対応になっているので心配はないが、充電器が 100 ボルト専用のものを日本から持参した人も多く、貸し借りが盛んだ
- パソコン本体は 240 ボルト接続で問題なく動くが、外付けの DVD ドライブは頻繁にアラームが出て停止する。「大きな電流変化があった」ために起こるようだが、どうやら、船内の電圧変化が大きいようだ

→ [目次](#) に戻る

第4章＜多彩で多様な船内人間模様＞

■ 一芸に秀でた趣味人

- 船内には一芸に秀でた趣味人が多数居られ、自主企画などで腕前を披露している。かなりの実力の持ち主だが、プロではないので、発表会などで笑ってしまうような光景も起きる。元旦に琴と尺八の演奏があったが、途中で何度も音程が崩れていた。振袖で日本舞踊を踊ったお婆さんもいたが、旅の芸人一座の踊りのようであり、何ともほほえましかった
- 2月11日に「上野恵美子」リサイタルという自主企画の催しがあった。25年前まで日本全国を行脚して回る「寅さんに出てくるリリー」のような存在だったそうだ。4人部屋の仲良し仲間が企画し、バイアに100人以上観客を集め、大成功だった。ところどころで本人が涙ぐんでいた様子が見えた。若い頃の苦労を思い出したのだろう。歌もうまいが、立ち居振る舞いや所作が、踏んだ場数の多さを物語っていた。この人は、大晦日の船内紅白歌合戦にも、赤組のトリとして出演して、やんやの喝采を獲た(元)芸人だ

■ 木枯らし紋二郎タイプの乗客

- 「あっしにはかかわりのね一事でござんす」とばかりに、船内では人付き合いもせず、企画にも参加せず、船内新聞も読まずに、一日中1人でぶらぶら過ごす人たちが少なからず居る。聞けば、陸上でも同じ生活らしい。この船に乗れば、3食ついて気楽だし、人が大勢居て寂しくないから乗っているとの事。ピースボートは「家庭内難民」のたまり場を提供しているのかもしれない
- 上記のように社交的なかかわりをまったく持たないわけではないが、大半の時間を自室や公共スペースで過ごし、読書三昧の人も少なくない様子だ

■ 目立ちたがりの乗客

- 船内にはどこにでも顔を出していつの間にか先頭に立ち、目立つ人が居る。遠慮ということを知らず、極楽トンボみたいな存在だ。よく言えば、世話好きで、陸上では町内会や団地の自治会長などを率先して引き受ける人なのだろう
- 社交ダンスやエアロビ、ヨガなどで、必ず先頭に場所をとる人が数名居る。熱心と言えなくもない。社交ダンスの発表会などでは一番目立つ「お立ち台」に立つことを希望して踊るのだが、周囲の人より見劣りしたりして、見苦しい。いわゆる、自意識過剰タイプだ

■ ひたすら写経に励むお爺さん

- 8階の共有スペースの机と椅子を1箇所占有して、ひたすら写経(般若心経)に励む84歳の男性が居る。ピースボートに11回乗っているそうだ。いつもこの世の不幸せを1人でしょいこんでいるような無愛想な人だが、「写経するなら船に乗らなくてもよさそうなものだ」と余計な詮索をしたくなるし、写経するならもっと周りの人が楽しくなるような顔をしてほしいと思う。この人も多分、独り身で寂しいから乗っているのだと思われる。ピースボートは孤独で寂しい人

の、手ごろな安らぎの場なのかもしれない

■ 厚かましくて恥知らず、自慢話ばかりのいやなおやじ

- 8 階の共有スペースの机と椅子をワンセット占有し、「2 度の脳疾患と両足不随を乗り越え、日本列島離島めぐり〇〇達成、富士山 10 回登頂達成」と書いた赤旗を掲げ、旅の記録を綴ったファイルを広げ、色紙まで書いて誰彼となく渡し、全員が見る伝言板に「元気が出る色紙、あと 25 枚、早い者勝ち！」と書いたメッセージを恥ずかしげもなく貼り出し、自慢話にうつつを抜かすおやじが居る。

船内のどこにいても会話に入ってきて、いつの間にか自慢話につなげるいやなやつだ。船内の自主企画では毎週、15 回に亘って自分の旅行の自慢話をひけらかす席を設ける厚かましきで、辟易する。まるで有名人気取りだ。

あの人は地元に住場所が無いのだと思う。地元の人から見たら鼻持ちならないいやなやつだろう。だから、話を聞いてくれる旅好きな人が大勢居て、優越感と快感を得られるこの船に乗るのだと考えればあの振る舞いに説明がつく。

■ まるで純愛小説のようなすさまじい人生を過ごした女性

- 北海道で看護婦を長年務めた 64 歳の女性が居る。食堂で一緒になったときの第一印象はミーハーの軽薄なおもしろいお婆さんというものだった。ところが、船内で大晦日に「紅白歌合戦」があり、その彼女が悲しい愛の歌を歌ったのだ。司会者のナレーションが気になった。「悲しい別れを乗り越えてエミリー(船内ニックネーム)が歌います」。第一印象と余りに違うのでエアロビで一緒になったときに声をかけ、率直にその疑問をぶつけたところ、晩御飯を一緒に食べながら詳しい話を聞くことになった。長い話をまとめるとこうなる。61 歳で看護婦を辞めた。何十年ぶりに高校の同窓会があり、ある男性と再会した。数人で再度集まることになったが、その男性の行方がわからない。やっと探し当てて会ったら、あと 3 ヶ月の命と判断される(彼女はナースだからわかる)不治の病に冒されていて人目を憚って隠れていた。できるだけ長く生かすべく看護に努め、1 年 4 ヶ月の命を長らえた。彼女は一生独身を貫くつもりだったが、男性の家族から請われ、死ぬのがわかっていて結婚することになった。結婚して 4 ヶ月で相手の男性は亡くなった。
- 話を聞き終えたとき、私はポツツと言った。「気に障ったらごめんなさい。あなたは高校のときからその人が好きだったのではないですか？ 高校の同級生、ナースとしての使命感だけで看護したとはどうしても思えない」。彼女はそれに答えて「そうね、そのとおり、やっと自分の正直な気持ちの整理がついた」

■ 絵描きがごろごろ

- 船内には絵の達人がたくさん居る。水彩画の先生として乗っている人だけでなく、プロに近い絵描きが数人乗っておられ、すばらしい手本を見せてくださるのだが、うらやましい気持ちで一杯だ

■ 海坊主がごろごろ

- 船内には、やたらと日焼けして色が黒く、坊主頭で「海坊主」みたいな人が 5 人居る。最初は見分けがつかなかったが、興味を持って接したら、みんな、親しく言葉を交わすようになった

■ 毎日着物を着ている男性

- 毎日違う着物を着ている男性が居る。人づてに聞くと着物を自分で仕立てるらしい。今日はどの着物かが楽しみだ。女性でも着物姿をたまに見かけるが、珍しい。大晦日と正月には着飾った女性が大勢登場し、船内が明るくなった
- 私も浴衣を持ってきており、時々着ている。帯は端っこが出来合いの折になっており、マジックテープで締めることができ、3 分もあれば完了だ。インターネットで買ったのだが、雪駄がついて 3000 円と手ごろ。信じられない安さと手軽に着られるのが魅力だ

■ 歩く鉄人

- 船内で、歩く鉄人数人と知り合った。
- 74 歳の福岡の男性：佐多岬から宗谷岬まで歩いた、フランス国境からスペイン北部の教会までの 800 キロの巡礼道を 2 回歩いた、熊野古道の踏破や琵琶湖一周を計画中。この人は、寄港地ではできるだけオプションコースに入らずに自分で歩くように計画的な行動をとっている。スペイン語が少しできるので、数人のおばさん方がくっついていくようだ。イースター島（小豆島より少し小さい）に寄港したときに、島を 1 周すると言って出かけたが、そのこまめさに脱帽だ
- 60 代後半と思われる名古屋の女性：四国 88 箇所歩き遍路（1400 キロを 43 日で歩く）を 5 回やった、
- 日本百名山全部やあと少し、ヒマラヤ縦走、車やバイクや電車でオーストラリアやシルクロードを縦断したなど、武勇伝を持つ人が多数乗船している。「山の会」というのができており、定期的に船内居酒屋に集まって親交を深めている
- 84 歳のひたちなか市のお婆さんは、50 キロスリーデーマーチに毎回参加し、オランダなど海外遠征も度々やっているとのこと。船内で自分より若い人に正しい歩き方を教えているほどの元気さだ。この人は何かあれば必ず自分の自慢話になるのだが、明るく快活なので、いやらしく聞こえないのがいい。得な性分だ。とは言っても、この婆さんの悪口を言う女性が多い
- 夜は 8 時に寝て、朝は 4 時に起きて船内を 10 キロ歩きまわる「徘徊」グループがあると聞いていたが、先日、3 時半に目覚めて 8 階に行ったら、すでに数名が起きて歩いたり、掲示板を見たりしていた。4 時半になると、数十名が船内を歩き回っていた
- 若い人は、深夜までバーなどに集まって騒いでいる。船内では世代間の生活時間帯の差が大きい、陸上と同じなのかもしれない

■ 走る鉄人

- フルマラソンや 100 キロ走で鍛えている女性から聞いたが、週に 1 回、20 キロ走るそうだ。乗

船中は走れないのでせめて歩いて身体がなまらないようにしているとのこと

■ 旅の鉄人

- 上記の「歩く鉄人」のように歩き通すわけではないが、船内には旅の鉄人が多数居る。中国 17 回を含む海外旅行 77 回、大半が秘境に近いような場所に行っている 80 歳の女性がその 1 人だ。これが最後と乗り込んだが、自分よりはるかに年の人が元気に活動している姿を見て考え直しているようだ
- 旅の記録を一覧表にして持ち歩いている 79 歳の女性が居る。B4 の紙 3 枚にびっしりの記録（時期、行き先）を拝見したが、驚くことばかりだ。23 年間で 40 カ国を訪れ、4500 万円使ったようだ。この人もこれが最後と乗り込み、乗船前に身の回りを片付けてきたと言っていた。船内で気に入った人に物をプレゼントするのが楽しくて仕方ないような好人物だ
- 61 歳の定年後すぐにアメリカ鉄道横断の旅を実行した男性が居る。旅行記を写真入の小冊子にまとめておられ、頂戴した。詩吟や英語で落語にも取り組む元気な 67 歳のおじさんだ

■ 病気を克服した人

- 脳梗塞で入院し、退院後に乗船した男性と知り合った。なかなかの知識人だと思ったら、外資系金融機関勤務とのことだった。海外生活が長く、奥さんも英語が堪能だ
- 本人の病気ではないが、奥さんにすい臓を片方提供した人が乗っている。奥さんは移植にもかかわらず亡くなったとのことだ。そうした経緯を船内の自主企画で熱く語っておられた。船中には、このように病気と闘った人や、病気の家族を持つ人が多いようであり、その苦しみを、自分と似た境涯の人と分かち合うことで安らぎを求めたいようだ

■ 療養中の人

- 乗船直前まで数ヶ月入院していた男性二人と知り合った。1 人は糖尿病、もう 1 人は肝臓病のようだ。それぞれ、数十キロ痩せたそうだが、健康を気遣いながら船内生活を送っておられる

■ 酔っ払い

- 船内には昼間からバーで日本酒やウイスキーを飲んでいる 84 歳のお婆さんが居る。2 月 23 日に聞いた話だが、共用の女性トイレの前でころんで倒れていたところを手を貸して起こしたようだ。船の揺れがきつかったので、アルコールの影響もあって転んだらしい
- 男性でも昼間から飲んでいる人を結構見かける
- 9 階には「波平」という船内居酒屋があり、夜はにぎやかだ。ウイスキーや焼酎、日本酒などのリザーブをして仲間や 1 人で飲んでいる人で一杯だ。つまみや料理も、陸上と変わらないものが注文できる。握りずしセットの予約も受け付けている。ラーメンやおでんもある。陸上の居酒屋の延長だ。ピアノバー風で瀟洒な雰囲気のあるバーもあるが、客は少ない。日本人は、肩の凝らない居酒屋の雰囲気のほうが好きなようだ

■ 誰かれ構わずしゃべくりまくるおばさん

- 船内には、傍に居る人間に、誰彼構わず話しかけてきて、一方的に、ひたすらしゃべくりまくるおばさんが居る。それも、複数居るのだ。いつぞやは、伝言ボードを見ていたら、70 半ばくらいのおばさんが突然話しかけてきて、自分のキャノンのデジカメが無くなり、出てこない話を 15 分近く聞かされた。悪い人ではないので、顔を見たら挨拶したり、カメラは出てきたか？と聞いたりしているが、世の中には面白い人が居るものだ

■ 文化の違いを許容しないおじさん

- 船内には CC と呼ばれる国際スタッフが居る。英語やスペイン語の通訳や事務局の仕事をして居る。彼らが人と会うときに大きな身振り手振りで「ハグ」をするのを極端に嫌い、やめるように要求している人が居ると聞いた。自分がハグされたときに「やめろ！」と露骨に文句を言って、外人を萎縮させるばかりでなく、「この船の乗客は日本人だけだから日本の習慣を通すべきであり、西洋式の習慣はやめさせるべきだ」と主張しているそうだ。驚いたことに、そのおじさんはアメリカに 10 年も住んでいたらしい
- 船内で知り合った人から意見を求められたので、「グローバル人材とか、国際感覚を持つというのは、文化や習慣の違いを尊重して認める態度や人のことだ、そのおじさんは、文化の違いを許容しない、心の狭い、ずいぶんと変わった人だと思う」と伝えた

■ ひげのおじさん

- 船内にはひげをはやした男性が 20 名くらい居るが、似た風采の人が何人か居て、最初は区別がつかなかった
- 私も、船内で知り合った人(後述の白鳥さん)に誘われて、ひげを剃らずに、3 週間伸ばしたが、5 歳くらいふけて見られるし、女性ファンたちから不潔という声もいくつかあったので、きっぱり剃った

■ 船内家族

- 「船内家族」という自主企画を立ち上げ、世代を超えて交流する人たちが居る。「〇〇家」という名前をつけて、10 台から 80 歳台まで、30 人くらいの人が参加する家族もできている。そうした家族間で婚礼(もちろん、擬似)のやりとりもあり、見ていてほほえましい
- 自主企画で呼びかけるわけではないが、以前からの旅仲間が集うグループもある。85 歳(千葉県)と 68 歳の男性(滋賀県)、90 の女性、もう 1 人は 80 台半ばという組み合わせの仲良しグループもある。先日、この 85 歳の男性から声をかけられ、晩御飯を一緒にしながら歓談した。聞けば、男性二人は同室で、ピースボートに同室で 3 回目の乗船だそうだ。九州のもう 1 人も含めて陸上でも交流があり、9 月には車で四国の 88 箇所めぐりを計画しているとのことだ。千葉の鴨川にセカンドハウスがあるので遊びにくるように誘われた
- 大阪から乗っている 2 人の男性も以前から知り合いで、2 人部屋で仲良く旅を楽しんでいる

■ エアロビ皆勤賞の「てっちゃん」

- 「てっちゃん」と呼ばれる、80 歳の大阪の男性が居る。船内でよぼよぼ歩き回っているのだが、なぜかエアロビクスは 1 回も欠かさず参加している。いつも同じ服装。手足はほとんど動かず、よたよたと身体を揺らしている感じだ。盆踊りよりも動きが少ないのだが、本人は満足げだ
- この人は、ウクレレの同好会にも入っており、発表会でもがんばっていた。このように、お年寄りに存在感と活躍の場を与えるのがこの船の特徴だ

■ 準備万端の乗客

- 17 箇所の寄港地全部で記念写真を撮るときのために、場所を示すバナー(横 30 センチ、縦 5 センチくらいの紙にカラー印刷)を用意している乗客が居る。「タヒチの海」というバナーを出してきて、タヒチの浜辺で撮影するといった具合だ。次に旅をするときの智恵としてもらっておくことにしよう

■ 引きこもりの少年

- 母親、祖母と 3 人で乗っている 13 歳の少年が居る。船内で 14 歳になったそう。引きこもりで、2 度目の乗船らしい。外見は智恵遅れのように見えるが、そうではなさそう。
- 夜 9 時過ぎて 9 階の「波平」あたりをうろついたりしているようだが、陸上ではあつてはならない光景だ
- 船内は安穩として居心地がいいかもしれないが、陸上の生活はそうは行かない。彼が陸上で接する同年齢の中学生たちとの生々しいつきあいとは違い、船内では、事務局や乗船客からちやほやされているので、言うことだけ変に大人びていて、同世代には一番嫌われるタイプだ。他の若者も、大半が 20 台半ば以上であり、仲間としては参加できない。結局、彼がピースボートに乗って生まれ変わるのには難しそう

■ 旅で出会った多才なお坊さん

- 船内のカルチャースクールの一つに水彩画教室がある。この講師が、白鳥文明さんだが、本職は浄土真宗本願寺派のお寺の住職だ(莊嚴寺、山口県周防大島、460 年続く由緒ある寺)
- 教室開催の説明会に出たが、しゃべり方(イントネーション)が私の広島の実家と同じであり、軽妙な話しぶりにも感心して、船内居酒屋で生い立ちなどを伺った
- 水彩画ではなく、仏教について詳しく話を聞きたいとお願いしたら快諾してくださったが、1 人で聞くのはもったいないし、同じ希望を持っている他の乗客も多いことから、私が、自主企画の世話役を買って出て、「仏教 ABC」(12 月 19 日、60 名参加)、「新春白鳥住職辻説法」(1 月 2 日、150 名参加)を開催したが、大変な人気であり、2 月 19 日を目処に第 3 回目を予定している
- 講演内容はすべてビデオにとり、参加できなかった人にビデオデータを提供している
- 白鳥さんは「石ころ」という本も書いておられる。水彩画を添えた花便りと少年時代の思い出を綴った、大変に好感が持てる本だ。これも船内で回覧している

- 私がそのような活動をしていることから、船内の多くの人が、私のことを、白鳥さんと同行している、本願寺の関係者、もしくは坊さんと思いついていたらしい
- 白鳥さんは次男坊で、京都の美大で彫刻を専攻していたが、実家を告ぐ兄弟が居ないので、告ぐことに決め、龍谷大学大学院で仏教の勉強をしたとのこと
- お寺は、典型的な浄土真宗のお寺であり、信徒(檀家)のものだというスタンスがすばらしい
- お寺には本堂、集会所、ヨガ教室、アトリエまである。白鳥さん自身が彫った親鸞聖人の像もある(まるで、イラスト満載のホームページのような紹介用パンフレットから)
- 娘3人。長女が副住職でシンガーソングライター。旦那が元、中部電力社員。お寺近くでジャム工房を立ち上げ、「焼きジャム」として人気であり、全国に販売網が広がり、地元の雇用にも貢献している。地域おこしの模範例として注目され、政府の補助金を得て拡張するそう
- このジャム工房のパンフレットを講演会場で配ったら、出席者の1人から相談が持ち込まれた。広島「東洋高圧」という会社の会長さんだ。高圧処理することで、ジャムの製法が一段と改善するので、利益度外視で協力したいというような話だ
- 縁とは不思議なものだ。私は、仏教や神社を訪ねるのが好きだ。船内で偶然出会った住職の人間としての魅力にほれ込み、住職を船内でプロモートする「マネージャー」のようなことを勝手にやることになったが、住職が親しみやすい人柄であったこと、私の実家と同じようなイントネーションでしゃべり親近感があったこと、実家が浄土真宗であったことなどが、住職との触れ合いにつながったのだと思う
- 僧侶がみんな白鳥さんのようであれば、日本の仏教は衰退することなく、発展すると思う

→[目次](#) に戻る

第5章〈旅の景色〉

■ オプションツアー

- 乗船前に、17 寄港地(14カ国)で15のオプションツアーに参加する申し込みをした。シンガポールとモンテビデオは現地に居る日本人と夜の会食の約束があったので午後は独自行動にし、街の散策をした
- ツアー料金は値ごろ感から2割くらい高い印象だが、初めての地でもあり、言葉も通じないので、限られた時間内に効率よく観光スポットを漏れなく見て回るにはツアーが最適だ
- どこの寄港地でも好天に恵まれ、旅行を堪能できた。ランチやディナーがセットされているツアーでは現地の名物料理やワイン・ビールなどを楽しんだが、中でも、ブエノスアイレスでのタンゴショーは圧巻だった
- 唯一、雨に遭遇したのがイースター島。4 時頃から遠くで雷が鳴り、雲行きがあやしくなったが、5 時頃から激しい雨になり、バスに避難した。港から船まで 9 人乗りの小型船で行くのだが、雨と波しぶきでずぶぬれの状態の人が多かった。

■ 景色

- 初めての地だから感動するが、日本でも宗谷岬から宮古島まで隈なく旅行すればほぼ同じような景色を見ることができる。日本の風土のすばらしさを改めて認識した

■ 治安:旅先で泥棒にやられた乗客から聞いた話

- マダガスカル首都のど真ん中で、若い人 5-6 人が 10 人ほどの集団に取り囲まれ、金品を奪われた
- アルゼンチンのブエノスアイレスのど真ん中で、リュックを背負った若い女性がリュックを奪われそうになったので防ごうと手を後ろに持っていった隙に腰のウエストポーチから現金とカードが入った財布を取られた。現金はほとんど無かったが、カードを止める連絡をしたとのこと
- ウルグアイのモンテビデオの繁華街でも同様の目にあつた人が居ると間接的に聞いた

- 日本ではまったくと言っていいほど意識しない「治安」や「用心」という言葉が、旅先ではしばしば聞かれる。安全で安心な日本社会の有り難味を感じる

■ トイレ事情

- 有名な観光地でも、尿意が止まってしまうようなトイレが目につき、船に帰ったらおちついてゆっくり用足したいと何度思ったことか。日本のトイレの優秀さが懐かしかった。ウォッシュレットなどは奇跡に近い
- 「日本人は水と安全はタダだと思っている」という自虐的な表現があるが、今回旅して思うこと

は、これでは不十分で、「日本人は水とトイレと安全はタダだと思っている」と言うべきだろう

- 一部の例外を除き、どの観光地に行っても公衆トイレは有料だ。日本円で 10 円から 50 円くらいの料金、もしくは心づけを払う。お土産やなどでもこのようなところが多い
- 団体の場合は、ツアーガイドがまとめて払ってくれるので安心だった(もちろん、旅行代金の一部だが)
- もう一つ驚いたのは、トイレトーパーを水で流さないで、便器の隣に置いてあるゴミ箱に捨てることだ。ゴミ箱には蓋はない。節水なのか、排水設備が悪くて紙が詰まるのかは知らないが、初体験だ

■ 旅のキャンセル騒ぎ

- アルゼンチン最南端の町であるウシュアイアから出る南極船が故障でドックに入り、オプションツアーが中止に追い込まれた。150 人くらいが申し込んでいたようだが、6 割が予定外のコースで行くことになり、旅程に組み込まれていたイグアスの滝やイースター島への立ち寄りを諦めたり、追加料金を払ったりして不便・不都合極まりないと恨み言が多く聞かれた。4 割は諦め、急遽、追加された別のオプションコース(ボリビアのウユニ塩湖からペルーのマチュピチュ)に申し込んでいた。南極を目当てに乗り込んだ人も多く、高齢者の中にはこれが最後と意気込んで乗船した人もあり、ピースボートとジャパングレースの責任者は見ていて気の毒なほど叩かれていた。道理がわかった人も居られ、悪いのは現地の船会社であり、ピースボートとジャパングレースに文句を言ってもどうしようもない、とにかく代替案を早急に示せと言っておられた冷静な判断が印象的だった。

■ 高山病

- ペルーでは、2 泊 3 日のオプションコースに申し込んでいる。カヤオ(船の寄港地)→リマ空港→クスコ(3400 メーター)→マチュピチュ(2300 メートル)で 1 泊→ウルバンバ(2600 メーター)で 1 泊→クスコ(3400 メーター)で観光→リマを経由して帰船のルートだが、高低の差が激しい。特に、初日は一気に 3400 メーターの高度に立ち、そこからの移動なので心配だ。3400 メーターは富士山(3776 メーター)の 9 合目あたりだと思う。富士登山で頭が痛くなったことを思い出した
- マチュピチュに行く 1 週間前に高山病対策の通知があった。対策は水分を大量に取ること(1 日 3 リッター)、スポーツドリンクでナトリウムとカリウムを補うこと、ゆったり動くこと、大きくゆったりと呼吸すること、アルコールは控えること、入浴も控えるようにとのことだ。案内が来てすぐに売店に行き、ポカリスエットの粉末を買い込んだ
- 歩行中にばたきと倒れて数時間意識がなかったとか、頭痛がひどくてホテルに寝たきりになって下山したとか、高山病で苦しんだ人の話がいくつか聞こえてきたので不安になり、船医から高山病対策の薬を処方してもらった。薬は 1500 円だが、相談料が 1050 円かかるので 2550 円。3 錠を半分に割り、出発前の夜から 6 回飲む。つまり、半錠で 425 円なのでやたらと高がつくが、一種の保険みたいなものだ

■ 両替

- 寄港地でオプションツアーで立ち寄るところは基本的にドルが使えるが、小額のお釣りは現地通貨になることが多い。ドルはやはり世界通貨だ。アメリカの巨額の財政赤字にもかかわらず、どんな田舎でも信認があるからこそ流通するのだ。ドルは当分大丈夫だと確信した
- アルゼンチンペソとドルの交換比率が激しく動いており、公定レートと実質レートでは 4 割以上の差があった(ドル高、ペソ安)。ブエノスアイレスの街中ではもぐりの(個人の)両替屋があちこちで客引きをしていた。レートの差を利用して稼げるようだ。しっかりした店の買い物でも、ペソ・ドルの公定レートで 25 ドル相当の物が 15 ドルくらいの感覚で買えた

■ 船のゆれ

- 3 日に 1 回くらいは船が大きくゆれる。船酔い患者続出だ。トラベルミンが無料でレセプションに置いてあるが、あまり効果が無いという声を聞く。売店に磁気のリストバンドを売っているが、それをはめている人が多いようだ。気持ちの問題だと言う人も多い。揺れは、概して外海で発生するが、そうでなくても低気圧がくれば揺れる。船室の場所によってゆれ方がかなり違うようだ。私の船室は最後部の右舷。スクリュ一部が持ち上げられるような揺れがくると音がかなりするし、震度 5 くらいの地震で持ち上げられるような感覚がある
- 船の揺れが激しくなると、船内アナウンスがあり、デッキへ出ることの禁止と、ドアの開け閉めで指をつめることのないように注意が喚起される
- 船酔いがひどく、タヒチで下船して帰国する人が居た。船内で薬の融通をしてもらったりして世話になったので「波平」で送別会をした

■ 時差調整

- 横浜を出て帰るまで、24 時間の時差調整が必要だ。今日は 1 月 20 日、既に 12 回、12 時間時間を調整したことになる。リオからブエノスアイレスに入るときに 1 時間遅らせたのに、東に戻る方向となるモンテビデオでは 1 時間進めた。南米最南端のウシュアイアで再度 1 時間遅らせた。1 時間ずつの調整なので身体への影響は少なくて済む。ペルーを出たらイースター島、タヒチに出るが、その間も時差調整がある。ペルーを出て既に 3 回、1 時間ずつ遅らせ、2 月 12 日、日本との時差は 17 時間、2 月 15 日タヒチでは 19 時間だ。毎日のように、寝る前に時間を 1 時間遅らせる。昨日まで朝 6 時だったのが 5 時だ。つまり、同じ 6 時に起きるには 1 時間長く寝ることができる。でも、実際は、4 時くらいに目が覚める人が多く、会話を聞いていると、時差調整を忘れ、いつもの時間に起きた人が結構居る。部屋に居ても仕方ないから、8 階の公共スペースにたむろして時間をつぶすのだ
- タヒチを出て、日付変更線(180 度)を超えると、1 日が無くなる。損をした気分になるが、これまで時差で遅らせた分は得をしていたのだから、チャラだ
- 日付変更線(180 度)の前は領土が複雑に入り組んでおり、時差の設定が政治的に決められているのでややこしい。同じ地域にありながら、フランス領サモアとアメリカ領サモアでは時差が異なるといった具合だ

- 10 月初旬にアメリカに8日間出張したが、いきなり 14 時間の時差があり、帰国してもしばらく苦労した。時差の戻りは 1 日 1 時間というので、アメリカに行って帰ったら、回復までに 2 週間要するようだ。これは、実感と合致する

■ 通信事情

- 8 階に無線 LAN が使えるコーナーがあり、そこからサーバーを経由して衛星でインターネットに接続できる有料の仕組みがある。100 分間使えるカードが 3800 円もする。つながりはするのだが、通信スピードが陸上の 30 倍以上遅く、メールの簡単なテキストを送るだけでも信じられないような時間がかかる。仕方ないので、メールのヘッダーだけをダウンロードし、気になるタイトルのもので中身をダウンロードし、ダイレクトメールのようなものはサーバーで削除する機能を使っている。ヘッダーをダウンロードしたらいったん切り、返信を書いて送信モードにしてからもう一度接続し、数件のメールを一度に送るようにしている
- スピードが極端に遅いので、グーグルサーチはおろか、特定のウェブページも見ることができない。開くまで膨大な時間がかかり、開いても、ページめくりなどができないのでとても使いものにならない。おかげで、幸か不幸か陸上生活で慣れっこになっていた終日メールと格闘するという習慣がなくなった。これにはメリットがあるので、陸上でもこの方法を採用しようと思う。メールのやりとりは 1 日 1 回まとめてやればずいぶん効率的だとわかった
- イースター島を出てタヒチに行くまで、2 日ほど、衛星回線が繋がらなくなった。船内のサーバーには無線 LAN ですぐつながるが、「接続」ボタンを押していくら待っても応答が無い。8 階の WIFI エリアまで何度も無駄足を踏んだ
- 携帯は思いだしたようにアンテナが数本立つ。私のはソフトバンクだが、会社によって、つながり方が違うようだ。提携している通信会社のサービス網の違いなのだろう。いずれにしても、大きな街がある陸上に近いと携帯も使えるが、大洋に出るとまったくだめで、いつも「圏外」の表示が出る。大洋に出たら、娑婆世界とのつながりを切るということが大事だとわかった

→[目次](#) に戻る

第6章<寄港地点描>

■ アモイ点描

- 遣唐使の頃から知られた名前だが、アモイと言うのは福建語だそう
- アモイの自動車には「門がまえの中に虫」と書いて「ビンと読む漢字がある。その地域は、昔、そう呼ばれていたそう
- 観音さんで有名なお寺があるが、日本のお寺とは趣がかなり異なる
- 海岸沿いには高層ビルが立ち並び、高級マンションや豪華なヨットハーバーもあり、富裕層の存在をうかがわせる
- 街の繁華街は活気があり、食堂では、やはり中国だと感じさせるものがある
- 上海などと同様に、モノが豊富でバラエティーに富む

■ シンガポール点描

- どこに行っても若い人が多いのに驚く。街並みは近代的で、きれいで、衛生的。欧米人が多いのにも驚く。地下鉄の切符のシステムはよく理解できなかった
- オーチャードストリートの店で、紅茶など船内で消費するものを買った。繁華街は日本の影響が強く、コンビニのセブンイレブンは至る所にある。商品こそ異なるが、展示の仕方など日本とそっくりだ。日本資本のプレゼンスの大きさをうかがわせる
- リトルインディアの中華料理店で、駐在している日本人の友人を誘って、4人で食事した。カニがうまいと聞いていたのでたらふく食べて飲んで堪能した。1人5000円だったが、あんなものだろう。ただ、カニを手づかみで食べたあとに使うウェットティッシュや食後に頼んだお茶もしっかりチャージしてあったのは新鮮な驚きだった。横浜の中華街とは違うのだ！

■ モルディブ点描

- モルディブはサンスクリット語で「島々の花輪」を意味するらしい。インド洋に、南北860キロ、東西118キロに亘って広がる26の環礁に散らばる1200もの島が、美しい花輪に見えるのでその名がついたとのことだ。その中の一つの「パラダイスアイランド」という島のリゾートホテルに1泊して海水浴を楽しむツアーに参加した。海はきれいで申し分ない。ホテルはリゾート気分が満喫できる、大規模な作りだ。食事はバイキング形式だったが、メニューの豊富さは絶賛。
- 金持ちの中国人客が多く(日本人の5倍くらい)、ホテル内や海辺の施設では中国語の表示が目立った
- 首都がある島にも行ったが、歩いても周囲を1時間くらいで歩ける大きさ。人口密度が世界一と言われるだけあって、人でごった返している。住民はインド系が多く、イスラム教徒。農業、

漁業、リゾート観光しか産業はないが

■ モーリシャス点描

- 四国くらいの大きさの島だ。南海の楽園という雰囲気だが、たまに来てリゾート気分に入るのはいいが、住みたいとは思わない。それこそ、何も無いのだ。
- 寄港地の反対側までバスで行き、小島にボートで渡って、遠浅で海水浴を楽しんだが、海のきれいさは信じがたいほどだ
- 底がガラスでできている遊覧ボートで、海岸から数百メートル先まで遠浅の水中の景色を楽しんだが、死滅した珊瑚が多く見られた
- 大きなウニが大量にあるが、中身はスカスカらしい
- 乗船者に、モーリシャスの港の工事で5年ほど駐在していたという夫婦が居たが、懐かしそうだった。昔世話になった現地人を訪ねるとのことだった

■ マダガスカル点描

- 世界最貧国の一つだ。寄港地は首都とはいえ、貧しさが目立つ。やたらと暑くてほこりっぽく、住むにはきわめて不適切だ。フランス植民地だったそうだが、宗主国として、ここまで貧困を放置してきた責任は重いと思う。選挙が近いとのことだったが、部族対立や貧富の差に基づくイデオロギー対立などがあって極めて政情不安の状態らしい。街のいたるところで、カラシニコフ(AK47 自動小銃)を持った兵士が監視している
- 観光バスが着くや否や、みやげ物売りつけに来る若者や、乞食のような親子が金の無心に来る
- 北アフリカの光景にも似ているが、フランス植民地であったこの国の貧しさと汚さはどこから来るのだろうか

■ ダーバン点描(南ア、インド洋側)

- ツアーで自然保護区を訪ねた。川と山へのサファリ旅行だ。ほぼ同じ緯度にある大西洋側のナミビアは砂漠だが、インド洋に面するこちら側は、自然が豊かで、緑も多い。ズールーという原住民の部落への訪問も面白かった

■ ケープタウン点描

- 緑の多い、美しい街であり、住みやすそうだ。観光ガイドの女性は日本人と結婚し、日本にも20年近く居たとのことであり、ほぼ完璧な日本語を話す人だったので、旅の楽しみが倍増した
- 南アは公用語は英語だが、オランダ語の系譜のアフリカーンという独特の言語の影響を受けており、発音がかなりわかりづらい

■ ナミビア点描(2013年12月28日)

- 独立前は南西アフリカと呼ばれ、ドイツの植民地だった。街は砂漠の中に突然とってつけたように存在する。今でもドイツ系市民が在住したり旅行者も多いそうだ。そのため、街中にはドイツレストランが多数ある。国の面積のほとんどが砂漠だが、ウラン、ボーキサイト、銅、錫、金、ダイヤモンドなどの天然資源に恵まれている。鳥取砂丘を何千も集めた風景をそうぞうすればいい。荒涼とした風景は映画のロケ地としても使われるそうだ
- 英語ツアーだったが、現地ガイドの英語のなまりについていけない乗客が大半だった。ある程度わかる人でも、正確に理解できる人はほとんどいないレベル。英語がまったくわからない人も多数居られ、請われて、車内でボランティア通訳をかって出て、感謝された

■ リオデジャネイロ点描(2014年1月7日)

- 建設の槌音が高く、活発な港町だ。観光スポットも見事だ。貧民窟もあるが、海岸沿いには立派なマンションやヨットハーバーなどが並び、豊かさを感じさせた。
- 日本でも有名な「コパカナビーチやイパネマビーチは砂浜こそ真っ白できれいだ、海の色は東京湾より汚れている
- 港のターミナルが無料の無線 LAN サービスを提供しており、船内の部屋でも使えた。つながりっぱなしにしてツアーに出かけ、その間に、ウイルスパターンなどの大容量ファイルをほぼ1か月分まとめてダウンロードすることができたのは幸運だった

■ ブエノスアイレス点描(2014年1月11日)

- 活気のある魅力的な街だ。歴史的な観光スポットも多く、タンゴ発祥の地区は特色があり、面白い場所だった
- 国際的に有名な名門サッカーチームの拠点になっている地区も巡った。サッカー好きにはこたえられないだろう
- 昼のレストランの肉料理は正に圧巻だ。串で刺して焼いた様々な種類の肉を目の前で切り分けて皿に載せてくれる。おかわり自由だが、そんなに食べれるものではない
- 夜のタンゴショーは「すばらしい」の一言だ。堪能した。ピースボートのツアーが貸切だったが、南米の客と比べて日本人客は静かだと聞いたので、周囲の人たちと示し合わせて大騒ぎして雰囲気盛り立てた。ショーの前に食事が出たが、これも巨大なチキンの料理。サーブを断わり、ワインだけ飲んだ

● アルゼンチン海軍と日本海軍のつながり

- ブエノスアイレス観光したときに日本人通訳がついた。4歳で熊本から家族とアルゼンチンに移住し、61年住んでいる男性だ。案内の中で、日露戦争前のアルゼンチン海軍と日本海軍との不思議な縁について説明があった。説明を聞きながら、司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」の一説を思い出した。日本海軍はロシアとの戦争に備えて戦艦部隊を強化する必要があり、イギリスから戦艦三笠・敷島などを購入した。不足分はアルゼンチン海軍がイタリアの造船所に発注していた2隻の巡洋戦艦を譲ってもらうような形で調達したのだ。「日進」と「春

日」の2隻。ガイドの人は知らなかったようだが、バルト海のリバウ軍港から大西洋～喜望峰～インド洋を越えて来航したロシアのバルチック艦隊をほとんど全滅させた「日本海海戦」で、若き山本五十六少尉候補(後の連合艦隊司令長官、前線慰問のためにラバウルから飛び立った飛行機がブーゲンビルで米軍戦闘機の待ち伏せ攻撃を受け墜落死)が巡洋戦艦「日進」に乗っており、ロシア・バルチック艦隊の砲弾を浴びたときに指を2本喪失する怪我をしているのだ。

■ モンテビデオ点描(2014年1月12日)

- 日曜日だったこともあるが、市中心部は閑散としており、古びた街の雰囲気はポルトガルのリスボンやスペインの港町に似ていると思った
- 街の北部に向けてつらなるビーチでは、1月18日まで夏休みということもあったのだろうが、多くの人が海水浴をしており、夜の6時を過ぎても混雑していた
- 在モンテビデオの日本国全権大使(前サンパウロ総領事)が私の友人であり、夕方5時に船に来て見学する段取りをした。歓迎のメッセージもFAXで送ってもらい、船の掲示板に貼ってもらった。800人くらいの日本人が一度にまとまってウルグアイのモンテビデオに上陸することなど滅多に無いから、大使に寄港の情報を伝え、歓迎してもらったという次第。船内見学のあと、大使公邸で食事しながら懇談した。大使で赴任したのが5月中ごろ、私が乗船を決めたすぐ後だった。寄港地にモンテビデオが含まれており、縁の不思議さに驚いた。日本の味の品物を持参したが、日本食は手に入りにくいので重宝された

■ ウシュアエア点描(2014年1月17日)

- オプショナルツアーで近隣を訪ねた。「地球の果て」という名前の小さな鉄道に乗って景色を楽しんだが、日光の戦場ヶ原と変わらない程度であり、たいしたことはない、湖も行ったが、信州などの山間に行けばいくらでもある景色だ。遠くまで来たから感心してみているが、日本の自然のすばらしさに改めて気がついた次第だ
- レストランでの昼食時に肉料理を堪能した。これぞ肉！
- ウシュアエアの街のスーパーマーケットで買い物をした。肉やハム、チーズなどは日本の半値以下だが、他のものは日本と変わらない。生ハムとチーズを買い込んで船内でワインと一緒に楽しむことにした
- タラバガニのようなカニが名物であり、数軒のレストランが船の乗客に占拠されている状態だった。聞くと、大き目の1匹を数名で分け、お酒も入って一人4000～5000円くらいの出費だそう。決して安くはない。カニは甲羅がごつごつとして持ちにくく、甲羅のミソがほとんど無いらしい
- ビーグル水道には、巨大な氷河が海に張りだしている場所がたくさんあり、1日かけて船が遊覧した。クルーがボートを出して氷河のかけらを集め、かち割りにしてウイスキーやカクテル入れてくれるのだが、この場合、500円追加だ！話の種に私も注文したが、高い分だけおいしかったような気持ちになったから不思議なものだ

■ チリ点描(2014年1月24日)

- バルパライソという、首都サンチャゴの外港に寄港し、海岸線に沿って町並みを見学するツアーに参加した。街以外は砂漠だ。山のてっぺんまでぎっしりと家が立ち並び壮観だ。日本なら建築基準法違反になることは間違いない。貧富の差の激しさがいたるところに見られる
- この港は、ゴールドラッシュに沸くアメリカのカリフォルニアに行って一攫千金を夢見る多くのヨーロッパ人を運ぶ船の中継地として栄えた。ところが、1914年にパナマ運河ができてから、寄港する船がそれこそゼロになり、衰退の道を歩み始めた。追い討ちをかけたのが、ドイツが開発した人口硝石である。こうして、チリの主たる輸出品は買い手が無くなり、地元経済の衰退に拍車がかかった
- バルパライソには12の大学があり、35万人の人口の内、10万人が大学生だそうだ。そのため、学生の下宿で生計を立てている人が多いと聞いた
- 港近くに巨大なスーパーマーケットがあり、ワインと、ピスコという酒を買った。300から500円も出せば上等なものが手に入る。ピスコサワーは飲みやすく癖になるが、ワインや日本酒並みのアルコール度があるので、飲み過ぎないように要注意だ

■ ペルー点描(2014年1月28~31日)

- 首都リマ、クスコ、マチュピチュ、ウルバンバを訪ねた
- 抜群の天気であり、マチュピチュも、絵葉書通りの景色を堪能した
- 現地ガイドは日系3世だが日本語はたどたどしさが目立った
- 貧しい国だ。バスや鉄道の乗降口に物売りが来て片言の日本語で民芸品を売りつける
- ペルーはブラジル、アルゼンチン、チリと比べて物価が3割くらい安い印象だ
- 貧富の差が激しく、汚さが目立つ国だ
- 極端に言えば、500年前にスペイン人によって滅ぼされたインカの頃から進歩しておらず、破壊されたインカの遺跡を見世物にして観光客を集めて食いつないでいる印象がある
- それにしても、スペイン人は富を根こそぎ奪い取り、のうのうと本国で贅沢をし、植民地経営は放り出し、社会インフラ建設など何一つやってこなかったと言ってもいいのではなかろうか
- インカの世界観は、天上界、地上、死者の国の3つであり、それぞれ、コンドル、ピューマ、蛇が象徴している。インカの街づくりはそうなっている。コンドルの姿はマチュピチュに代表され、インカの首都であったクスコはピューマの形でできている。蛇が象徴する死の世界の遺跡はまだ見つかっていないそうだ

■ イースター島点描(2014年2月6日)

- 人口6000人、小豆島より少し小さく、周囲60キロくらいの島。断崖絶壁となだらかな丘陵、ところどころに遠浅の砂浜がある。ここは、他のどこの島や陸地とも3000キロ以上離れている

絶海の孤島。観光以外の産業は無い

- 船が横付けできる港湾施設が無いので、船は2キロくらい沖に投錨し、9人乗りの、船外モーター(すべてヤマハ)付の漁船で往復する。穏やかに見えても太平洋のど真ん中なのでさすがに揺れは大きい
- 海の色が真っ青で、ほかとは大きく違う。「群青」とはこのことだ
- 雲の動きが激しく、スコールが頻繁だ
- 巨大なモアイの像は、海岸付近にあるものは内陸を向いて立っているが、石切り場から近いところに放置してある像は海の方を向いている。何のために、どのようにして作ったのか、諸説あるが、虚しいとしか表現のしようがない

■ タヒチ点描(2014年2月15日)

- 奇怪な山の姿、原生林の熱帯雨林
- 雨季だからだが、蒸し暑く、直射日光が厳しい。まるで梅雨の最中の日本のようなのだが、木陰に入ると空気がひんやりとして、涼しく感じる
- 海は期待していたほどきれいではない
- 寄港した島の中では一番近代的できれいだ(フランス領)
- 街の通りに信号が無いが、通行人を見ると必ず止まってくれる優雅さがある
- 街の中心部で、中国人たちによる「春節」のパレードがあった。タヒチで中国人の旧暦の新年の祭りを見るとは夢にも思わなかった。港の近くのロータリーで屋台がたくさん出ているのだが、大半が中国人経営の店だ。商人としての中国人のバイタリティを感じる
- 15日早朝に寄港し、夜に出航する予定だったが、南極に行った人達の帰りの便が遅れていたために出発が1日延び、翌日の13時に変更された
- 出港式に、4グループの乗客が出て、フラダンス、タヒチアンダンスを披露した。中年男性も1人居てほほえましい。プロの集団ではないが、船内で覚えた踊りを上手に舞っていた。集団で組織的に動くことのできる日本人の特性を見る思いだった。北朝鮮のような、お仕着せの、強制されたマスゲームではなく、一人ひとりが自主的に参加するのだが、俄かリーダーの指揮の下、きっちり演技できるのは、やはり、子供の頃からの社会的訓練のおかげだろうと思う

■ ラバウル点描(2014年2月27日)

- 行きかう車は大半が4輪駆動のバンや軽トラックだが、例外なく日本車だ。9割くらいがトヨタの商用車だ
- 通りすがりの人は、例外なく、車に手を振ってくれる。これはここだけの、初めての経験だ
- 「戦跡めぐり」のツアーに参加したが、期待を大きく裏切った。見るべきものがほとんどないの

だ。戦争博物館の展示の仕方などもお粗末だ

- 子供がやたらと多く、人懐こい
- 観光スポットに行くと、子供たちが集まって「ラバウル小唄」などの日本の軍歌を歌ってくれる。でも、これは日本統治時代の懐かしさを示すものではなく、日本人が観光客としてくるから、喜ばすためにやっていると考えたほうがよさそう
- ラバウルの港は大きな湾の奥まったところにあり、深く、水面は湖のように静かだ。乗客の 1 人が岸壁でシュノーケルとフィンを付けて海にもぐり、雲丹をとって、船内で仲間に振舞っていた
- 火山活動が盛んで、夜は、船から溶岩の火の粉が噴出している光景が見える

■ 番外編(南極、船内で聞いた話)

- 当初のツアーが中止になり、結局、4 つのグループに分かれて不自由ながらも南極に旅行する羽目になったが、行った人たちの反応は上々だ。多くの人が、アンケートで 100 点をつけたと言っていた
- いずれのツアーでも天候に恵まれ、上陸も最大限に楽しんだとの事。11 回上陸した人も居る。ドレーク海峡では、2 日くらいはかなりゆれて苦しんだ人が居たが、全体的にはおだやかな航海だったようだ
- 一つのグループは、ピースボートに乗ってウシュアエア(南極への基点のアルゼンチン最南端の町)を過ぎてペルーのリマまで北上し、そこで降りて、飛行機でブエノスアイレス→ウシュアエアに戻り、ウシュアエアから南極船で往復。ウシュアエア→ブエノスアイレス→メキシコシティ→ロサンゼルス→タヒチを 40 時間かけて空路で移動という大変な旅だったが、満足度は高かった
- 船内でのレクチャが立派だったそう。数カ国から専門家が乗っており、様々な知識を提供してくれたそう。クルーズで上陸できるのは、いわゆる「南極半島」だ。ここでは氷が解け、ごつごつした岩肌がむき出しになり、ペンギンなどの動物が生息しているが、氷が解けているのは、「地球温暖化」によるものではないという専門家の講義を聞いたそう。南極半島付近には火山があり、マグマが放出されているので海水温が上がり、氷が解けるそう。温泉もあるそう。また、鯨が絶滅寸前まで捕獲され(95%が居なくなった、主犯はノルウェーの捕鯨船)、鯨が食べていた小魚が繁殖したためにペンギンのえさが増え、そのためにペンギンが繁殖し、ペンギンの排泄物で雪が解け(太陽光のあたり方に影響を与えるらしい)というのが本当の話だと説明を受けたそう。すなわち、南極半島で氷が解けているのは、「地球温暖化」によるものではなく、鯨の大量捕獲による「食物連鎖」によるものという説明だ。因みに、南極中心部では、氷が厚くなっているそう
- ピースボートの一つのグループが乗った船は、乗客 115 人で中国人が 68 人、日本人 20 人、残りが雑多な国民だったそう。中国人の内 3 人は専属のコックで、乗客は、中国のエリート、富裕層で、学生も多数乗り、その勉強振りが際立っていたそう。皆、英語も上手らしい。添

乗員におんぶにだっこの日本人は、満足な船内交流もできず、見劣りしたらしい

- 84 歳のお婆さんが 1 人で乗っており、添乗員がその人につきっきりになり、他の乗客から文句が出ていたそう。欧米からの客は、そのような場合は、家族が付き添うのが常識だ。ピースボートでも家族で高齢の身内を世話している例もあるが、高齢者が単身で乗り込み、何かあれば、ピースボートやジャパングレースが面倒見る例が多い。ピースボートは、さながら、独居老人のお世話をする「洋上、世界一周付き擁護施設」と言えなくもない。ひるがえって考えれば、この線で利益が期待できるうまいビジネスかもしれない
- もうひとつのグループは豪華客船に乗って南極海をクルーズするコースだが、追加料金 85 万円を払ったにもかかわらず、添乗員の対応がお粗末であり、8 人中 6 人の乗客が体調を崩したそう（食事時間の調整などの不備によるもの、船の設備には不満なし）

→[目次](#) に戻る

第7章 <ヨーロッパ人による植民地政策の爪あと>

■ 罪深いキリスト教

- インカの首都であったクスコに象徴されるが、カトリック教会は、インカの神殿をぶち交わした礎石の上に立てられている
- 自分たち以外の文化を野蛮なものみなして破壊しつくし、自然崇拜を排除して住民を「教化」し、自分たちが信じる神を押し付け、その教義である「選民思想」に基づく先住民への差別と迫害を繰り返してきた
- このすさまじいまでの破壊と収奪、殺戮を見ると、キリスト教を禁じ、鎖国政策を採った先人たちは賢い選択をしたのではないかと思えてくる
- 乱暴に言えば、宣教師がまずやってきて、善人そうな顔をしてキリスト教を広め、次に軍艦がやってきて武力で恫喝し、占領後は、過酷な植民地政策による伝統文化の徹底的な破壊と金品の略奪が組織的に行われるというのが近代史。南米の地の至る所にその爪あとが残っている

■ 植民地支配政策

- スペインもポルトガルも、あらゆる資源を略奪して本国に送り、キリスト教を押し付ける野蛮で過酷な政策を推し進めるだけで、現地を豊かにするためのインフラ整備などの努力はほとんど何もしてこなかったように見える。その最たるものがペルーだ
- アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、チリは白人国家だ。スペイン人とポルトガル人が入植し、そのあと、イタリアで食い詰めた貧しい人たちが稼ぎにやってきた。その間に、欧州から持ち込んだ病気（性病やインフルエンザなど）や、過酷な植民地政策による奴隷労働などで原住民は死に絶えたようだ
- スペイン人が、アンデス原産のジャガイモ、とうもろこし、トマトなどをヨーロッパに持ち帰り、それが全世界に持ち込まれて世界を飢饉から救ったので、スペイン人による南米征服は世界に貢献したという説を唱える人が居るようだが、釈然としない
- 一方で、「スペイン人が征服したからこそ、南米ではスペイン語が共通語となり、域内交流が容易になった。征服がなければ、南米は今でもインカの時代から成長せず、マダガスカルよりも貧しく、アフリカのように部族間の紛争が続き、どうしようもなく政治的に不安定で、経済的にも遅れた地域になったであろう」との意見もある。そうかもしれない

■ 武力

- 観光ガイドの説明では、スペインがインカを滅ぼしたのは 1533 年のことだ。ピサロが率いた「ごろつき集団」はわずか 1500 人。その彼らに、インカは手も無くやられてしまうのだ。インカの内紛、スペイン人を見たときに、インカが伝説で待ち望んでいた神と間違えたとか諸説あるが、説得力に欠ける

- では、当時の日本はどうだったろうか？日本では、12 世紀中ごろから武士(軍人)が台頭し、鎌倉「幕府」と呼ばれる軍事政権ができたのが 1192 年。その後は武士(軍人)が日本を支配した。応仁の乱が京都で 1467 年に始まり、信長を経て秀吉が統一するまで、戦国時代と呼ばれる過酷な内戦の時代が 100 年以上続く。江戸幕府ができたのは 1603 年だから、応仁の乱から 136 年かかっている
- この間、火縄銃(種子島)が伝わったのが 1543 年だが、砂鉄を使ったタタラの製鉄技術と、刀鍛冶の伝統があったために、わずか 30 年後には、火縄銃の大量生産体制ができ、日本は世界でも有数の近代的な火力を装備した一大陸軍国であつたらしい
因みに、関が原の戦いでは鉄砲が数万丁も使われたという(司馬遼太郎の作品)
- スペイン人のフランシスコ・ザビエルがカトリックの教えをもたらししたのは 1549 年だ。ピサロがペルーで侵略を開始したのが 1532 年だから 17 年後だ。
- この状況を考えると、スペインの略奪者たちがフランシスコ・ザビエルをはじめとするカトリック宣教師達を道案内にして 16 世紀後半に日本を攻撃したとしても、戦国時代を通じて戦術と武力を鍛えぬいた屈強の武士(軍人)たちによって包囲され、あつと言う間に殲滅されたと思われる。日本側には、かなりの数の火縄銃が揃っていただろうし、インカの兵士のように馬を見たことがなく、けちらされるということもない。日本がスペインやポルトガルから武力で植民地にされるということはありませんでしたらうと思われる。
- 因みに、火縄銃を使うためには黒色火薬が必要だ。主原料は硝石だが、日本には無いので全量を輸入せねばならない。信長や秀吉は堺を直轄地とし、硝石の輸入を独占する体制を作ったようだ。代金は石見の銀で払う。当時のスペインやポルトガルの日本地図には IWAMI という名前が見える
- 鎖国政策で日本は平和を享受したが、欧米の近代化から取り残されたと言って、鎖国・キリスト教禁止政策を否定的に見る向きがあるが、南米ですさまじいばかりの略奪・破壊・キリスト教押し付け政策の爪あとを見ると、日本の先人たちの政策が間違っていたとは思えない

■ 奴隷貿易と移民労働

- スペイン語圏を良く知る人から聞いた話を紹介する。多分、その分析は正しいと思われる
- スペインとポルトガル人は南米で金を採掘したり、コーヒー農園で働かせるために、原住民では足りないので、アフリカから黒人奴隷を大量に連れてきて、奴隷として、家畜同然の扱いで酷使した
- 生産量が増えるにつれ、スペインとポルトガルの本国経済も豊になったが、奴隷貿易に直接かかわっていた新興国のイギリスやオランダは、やがて、奴隷貿易をやめる方向で動きだした。人道に反すると言えば聞こえはいいが、本音は、奴隷が入らなくなれば、スペインやポルトガルの植民地経営が回らなくなり、国力が落ちることを狙ったと言うのだ。これは、鋭い指摘だと思う
- アフリカの奴隷が労働力として得られなくなって困ったスペインは、イタリアのジェノバなどの

貧しい農民を大量に移民労働させるようになり、一部は土着した

- 労働条件が過酷なために、大量の移民労働者が帰国し、その埋め合わせとして招かれたのがアジア人、特に日本人だったというわけだ。日本人は、イタリア人のように文句を言わず、過酷な労働に耐え、現地に根付いたという説明だった

→[目次](#) に戻る